

討議年月日	2003年11月12日(水)
コーディネーター	加藤 好郎氏(慶應義塾大学三田メディアセンター事務長)
テーマ	図書予算の削減とサービスの向上
討議内容	<p>1.はじめに 慶應義塾大学三田メディアセンター事務長加藤好郎氏作成の「図書予算の削減とサービスの向上」の例題を基に3グループに分かれて討論を行った。</p> <p>2.設定(抜粋) 薩摩大学図書館では、下記条件で図書予算の削減が内示された。図書館のサービス向上を前提に選書課長の立場で、館内のコンセンサスをどのようにとるか、さらに大学の経理担当理事との折衝に如何にして望むかを検討せよ。 2003年度図書予算：1億8000万円 内訳 図書支出 1億4000万円/図書資料費 4000万円(うち逐次刊行物 2800万円 / 電子媒体 :1200万円) 2004年度図書予算：1億2600万円(前年度比 30%減) <電子媒体購入実績> CD-ROM(8点) 203万7300円 / オンラインデータベース(10点) 918万5000円 さらにNIIが無料で提供していたOUPの電子ジャーナルが2003年12月いっぱいまで中止となった。プリント版の購入に250万円かかっており、現在と同じタイトル数をプリント版とオンラインで維持するためには、10%(25万円)増の275万円を予算化しなければならない。</p> <p>3.各グループの発表</p> <p>[Aグループ] 基本姿勢として協力はしていくが、大学側との交渉では、削減幅を30%ではなく20%にして欲しいなど、妥協案を出していくべきである。30%削減を実施するなら、予算の費目全部から一律30%減とする。具体的な削減案として、図書は重複本を調査して、複本を買わないようにする。また利用率調査を行い、選書の段階で購入する資料を十分検討する。電子媒体は、CD-ROMについて全部切る。法人本部、就職課等で購入出来る資料はそちらで購入してもらうよう交渉する。似たようなデータベースを削る。OUPはコンソーシアムに参加し、オンライン版のみで提供し、プリント版はやめる。最も削れないと思われる図書予算からも削減するのであるから、教員、学生をはじめ、利用者から何らかの形で苦情や要望が出るかもしれない。次年度の交渉時にはそのような具体的な要望を挙げて、削減のパーセンテージをもっと減らしてくれるよう要求していく必要があるだろう</p> <p>[Bグループ] 交渉にあたって何を削減していくかを考える上で、まず誰にとっての図書館かを考えなくてはならない。学生数が減少している現状において学生にとって魅力ある大学図書館であるべきとし、研究者にしか利用できないデータベースや逐次刊行物は中止してもよいと考えた。まず、プリント版は中止し購入費を抑える。プリント版が必要な研究者は、個人、学科予算での購入を勧めていく。データベースなども他の予算で購入できないか検討する。結果、図書資料費を思い切って5割減とする。継続図書についても本当に必要かを検討し、不要なものは購入中止し、図書支出は2割減とする。しかし、コンソーシアムに参加してオンラインジャーナルを充実させたり、その他のサービスを行うなどで図書館の付加価値を向上させる。</p> <p>[Cグループ] 資料あってこそその大学図書館であり、図書は大学図書館の生命線でもあるので、図書予算30%削減をそのままのむことはできない。しかしながら、予算の削減は全学的な意向であり、図書館もなんらかの努力はしなければならない。図書費は安易に削ることはできないため、それ以外の方策を考えたい。例えば、OUPはオンライン版のみの購入とし、20万円減額させる。単体で価格の高いCD-ROM購入の中止。電子媒体と冊子体の重複をチェック。似たようなデータベースは低額なものに一本化する。オンラインデータベースの同時アクセス数を減らし、契約価格を引き下げるなどである。については、教員の反発、抵抗が予想されるが、プリント版からオンライン版への移行は避けられない情勢でもあり、この点については粘り強く理解を求めていくしかないだろう。大学側との交渉にあたっては、教員を味方につけ、学術情報基盤の重視という意味での図書館の使命を訴えていくことが大切だと考える。交渉の結果、30%削減を免れ得ないなら、図書予算からだけでなく、逐次刊行物や電子媒体等を含めたものから少しずつ削っていくしかないだろう</p>
まとめ	大学経営が厳しい実情を踏まえ、学生と教員の両方に予算削減の痛みを分け合ってもらう必要がある。学生にとっては、図書費の削減によって、購入できる図書が減少する。教員にとっては、研究者対象の電子媒体のカットを実施する。その他にも、CD-ROMからオンライン版への移行を実施し、サービスを向上させるとともに、その分を図書支出から捻出する。それ以外の経常経費等についても光熱費の削減を努力していくことなども併せて考えていく必要があるだろう
感想	図書予算の削減については、どこの図書館も直面している問題であり、具体的な事例に基づく今回のケーススタディは、大変有意義であった。
配付物	「図書予算の削減とサービスの向上」